

劇団そら「GONEN～あれから～」

「東日本大震災＝福島」。あれから、既に5年が過ぎた。未だに復興は足踏みしている。これが「阪神淡路大震災」とは異なる。その最大の要因と言えば、やはり「原発事故」だろう。「生き物」が住めない場所を創り出してしまったからだ。この舞台は、それに殆ど触れられていない。そのため、地名を言わなければ、此処が「福島」かどうか不明である。

「舞台設定」は、被災者たちが共同で生活しているシェアハウスの前、上手にハウスの入口。 horizont はブルー、舞台後方にはずっと足元程度に白い垣が続く。シンプルだが「舞台」として綺麗。

シェアハウスで生活している若い女性たち、男性も少しいる。やや、いさかいもあるが皆がいたわりあって生活している。

此処に、やや売れなくなった仕事の減った女性スターが地方巡業にいやいややってくる。甥っ子のマネージャーが今夜の宿を探しに、その留守に、スターは居住者たちと仲良くなってしまう。最終的には、中の地元男性と結婚し、此処に住み着く決心をする。だが、それでハッピーなのか。これからの生活はうまくいくのか。

舞台では、様々に、被災者たちの思い出を語っていく。だがそれでは、「個人」の領域から出ない。多くの人々の現状はどうなのか。「地域」がどうなっているのか、これから何が必要なのか、などがあまりよく判らない。現実に人々がまともに生きていく為には、ただの感傷ではすまされない。敢えて言えば、これならば「福島」でなくてもいいのではないかとさえ思ってしまう。

出演者は、誰もが元気で明るく、しっかりと演じている。だがこの舞台も、「出演者名」の記載はあるが、「役名」がない。これでは個々の演技などには触れられない。「演劇祭」は知人に見せるだけの舞台ではない。

もう一つ、付け加えれば、私は舞台上の飲食物の取扱い＝よくある「約束ごとのアルつもり演技」は、TVに「茶の間や飲食店」などの場面が映されてからは「不可＝不自然」だと思っている。加えて、アマチュアの場合は特に、「実物」でないと、「取扱い」がどうしても「いい加減」になりがちになる。「実物」を使っても、さして問題はないはずだし、観客の持ってしまう違和感も解消するはずだ。

今泉おさむ（日本演出者協会）